

## 地域全体で支える

### ■訪問看護

訪問診療とともに、社会の要請に待ったなしで応えていく必要があるのが訪問看護です。患者さんが快適に療養生活を送れるようにし、自立に向けた支援をする重要な仕事です。訪問看護ステーションが提供するサービスをみると、地域の実情に合わせた柔軟な取り組みが目立ちます。風光明媚（めいび）な大村湾を望むNHO長崎川棚医療センター（長崎県川棚町）の訪問看護活動を紹介します。



患者さんの自宅で親身になってケアをする  
長崎川棚医療センター・訪問看護ステーションの看護師（右端、左端）＝長崎県川棚町

川棚町は佐世保市と大村市に挟まれ、今後人口減少が進み、高齢化率も2040年には36.6%に達するとの予測もあります。高齢化への対応が急がれるなか、訪問看護サービス体制の整備は最優先課題でした。

川棚町で訪問看護ステーションの必要性を最初に訴えたのは、地元の医師会でした。訪問診療のニーズは増すばかりにもかかわらず、医師たちの高齢化という現実もあって、週末や夜間の対応には限界があります。そもそも在宅医療では看護サービスとの連動が欠かせず、「地域全体で支える」ために訪問看護ステーションの設置が求められました。

### ゼロからの出発

長崎県も医師会の要望を重視し、長崎川棚医療センターに24時間365日対応できる訪問看護ステーションを設置するよう要請しました。川棚町は同じ東彼杵（ひがしそのぎ）郡の波佐見町や東彼杵町、そして佐世保市の早岐地区を加えた3町1地区のほぼ中心にあり、同医療センターはこのエリアでは唯一の地域医療支援病院でもあるためです。



患者さん宅に出かける前の打ち合わせ。スケジュール表は訪問予定で埋まっている

県や医師会の要請を受け、同医療センターは立ち上げ準備に入りましたが、NHOとしても初めての試みです。2014年の「在宅医療（訪問医療）検討委員会」の設置に始まり、「ゼロからのスタート」（在宅医療支援・推進室の総括管理者となる宮田広事務部長）でした。

## 切れ目ないサービス

2015年4月の運営開始に向け、目指したのは「切れ目のない看護サービスの実現」（宮田事務部長）です。訪問診療を担当する開業医らとの連携に始まり、患者さんが退院後にスムーズな在宅療養に入れるよう、患者さんや家族を指導する退院前・退院後訪問を行う体制を築きました。

また、5つの病棟のうち1つの病棟を回復期機能を備えた「地域包括ケア病棟」に移行。訪問看護ステーションと連携しながら同年8月、患者さんを急性期から回復期、そして在宅医療までシームレスな医療サービスを受けられる環境を整えました。

管理者を務める出口祐子さんによると、訪問看護ステーションは看護師4人とリハビリ担当の理学療法士を加えた5人体制。利用回数は1人あたり月間10回程度です。サービス内容は、血圧測定や排便コントロールなどの体調管理に始まり、薬の飲み忘れなどをみる服薬管理、自宅入浴などを手助けする清潔援助の3つに大別されます。

目指すのは「温かみのある看護」。実際、利用者の1人、青水ミチさん（85）も「みなさんが優しすぎ、つつい甘えてしまいます。日中は1人の時間が長いから、ミナスコール、じゃありませんが、トイレのお手伝いまでお願いしてしまい…」と照れ笑いされていました。



訪問看護に必要な器具類は専用のバッグにコンパクトに収納する

NHOは、全国の5病院に訪問看護ステーションを設置していますが、最大の強みは各病院の有する幅広い医療人材でしょう。長崎川棚医療センターの場合、在宅医療支援・推進室のメンバーには認定看護師や薬剤師、栄養士らが加わり、宮田事務部長は「訪問看護師から現場の課題を聞き取り、院内の専門集団がアドバイスする環境にあります」と話しています。